

三 夏

「梅雨明け一〇日」というように、梅雨明け後は安定した晴れの夏空が広がる。九州の夏は太平洋高気圧に覆われて、連日三〇℃を超える暑い真夏日が続く。

気温や降水量などが、季節の平均状態から大きくずれると、干ばつや冷夏になり、社会に大きな影響を与える。昭和五十三年は平年より一五日も早く七月三日に梅雨が明け、昭和二十六年以降最も暑い夏になった。このため、水不足が深刻化し、福岡県の干ばつによる農作物の被害は一七億円を上回った。一方、昭和五十五年は、梅雨明け後、梅雨の戻りの状態になり、八月の雨日数は二一日、晴れの日数は四日と梅雨のような夏になった。福岡県をはじめ九州北部各県では夏の低温・長雨・多雨・日照不足によって農作物をはじめ、社会生活全体に大きな影響を与えた。両年の比較を第2表で示す。

四 台風・秋霖

熱帯地方で発生する低気圧を熱帯低気圧といい、北西太平洋で発生した熱帯低気圧

第2表 福岡の昭和53年(1978) 暑夏と昭和55年(1980) 冷夏の比較 (福岡管区気象台 1990)

	真夏日	熱帯夜	夏(6~8月)の平均気温	8月の	
				晴日数	日降水量1ミリメートル以上の雨日数
昭和53年	79日	39日	26.9℃	21日	8日
昭和55年	22日	2日	24.2℃	4日	21日
平年値	53日	19日	25.3℃	17日	9日

のうち、中心付近の最大風速が毎秒一七・二メートル以上になったものを台風という。一年間に発生する台風は、平均すると約二七個である。月別発生数、九州への上陸数は八月が最も多く、九月、七月がこれに次ぐ。

福岡で観測された最大風速や最大瞬間風速の五位までの値は、すべて台風によるものである。台風が九州のすぐ西側を北上した場合と、強い台風が九州を縦断した場合に記録されている。

台風は熱帯で発生し、多量の水分を含んでいるため、暴風とともに大雨をもたらす。特に秋には、日本付近にある秋雨前線の活動を強めて、大雨を降らせることが多い。

九月になると太平洋高気圧が後退し、「北高南低」の気圧配置となり、日本の南岸には前線が停滞しやすくなる。このため、曇りや雨の日が続く時期が現れる。この前線を秋霖前線あるいは秋雨前線と呼び、この時期はもう一つの雨季である秋霖と呼ばれる。この時期は九州よりむしろ東日本で顕著に現れ、東日本では梅雨季の降水量より秋霖季の降水量のほうが多い。

五 秋

夏に日本付近を覆っていた太平洋高気圧の勢力が弱まって、大陸から移動性高気圧が進んでくるようになると、いよいよ秋本番である。

福岡では十月上旬になると、雨日数が減少して晴れの日が急に多くなる。九月と十月の晴天持続日数は一〜四日くらいが多い。しかし、十月は一〇日以上も晴天が持続することがある。これは、移動性高気圧が帯